



「硫黄バブ (IWO PUB)」戦後、米軍占領時に監視所を利用して作られたバブ跡。別名「大阪山キャバレー」とも 2023年（令和5年）8月撮影



二〇二五年、最新の『硫黄島』をお届けします。

優れた国際報道につとめた個人に対して贈られる「山本美香記念国際ジャーナリスト賞」の授賞式が令和六年五月二四日、日本記者クラブにて行われ、硫黄島上陸友軍八地下ニ在リ」を二昨年発表した酒井聡平さん（北海道新聞記者、全国硫黄島島民三世の会北海道支部代表）に贈呈されました。実際の遺骨収集作業、多くの取材、文献調査などをもって『硫黄島』の戦後の実情が伝わってくる点が評価されました。



「未帰還遺骨問題とどう向き合っていくのか。戦争が終わっても戦禍は終わらない」と語る酒井さん

「硫黄島上陸 友軍八地下ニ在リ」が
第十二回 山本美香記念国際
ジャーナリスト賞を受賞しました。

【インフォメーション】

- 戦後場所が不明になっていた「金明水（※地熱により蒸気となった水が貯まるところ。「銀明水（左下写真）」もある）」が発見されました。金明水、銀明水共に戦前は島民が出かけた時に水の補給をしていたという、貴重な水源です。
- 年に一度の《硫黄島》同窓会＝「定期総会（島民の集い）」の第53回（2024年度）が川崎日航ホテルにて開催されました。2025年度は9月14日（日）に開催予定です。
- ここ数年で自衛隊硫黄島基地隊員の方々のご協力により「戦跡」だけでなく戦前の「生活跡」が発見、整備されています。写真は東部落・水口家の薪置き場跡。
- 昭和11年生まれ、南部落出身《硫黄島島民一世》齋藤信治さんに、2024年6月に聞き取りを行いました。齋藤さんは2024年11月には遺骨収集にも参加。《硫黄島》への変わらぬ強い思いを感じました。



資料、情報求む！硫黄島に関することでしたら何でも。

ご自宅にございます《硫黄島》に関する文献、写真、映像等どのような情報でも構いません。現在、『全国硫黄島島民三世の会』では、歴史を風化させないために、貴重な情報を収集し、デジタル・アーカイブ化も含め、次代へつなぐ活動に取り組んでいます。

会員募集！『全国硫黄島島民三世の会』

祖父母の世代が「硫黄島旧島民」でいらっしゃる孫の世代＝三世の皆様へ。2018年に発足致しました『全国硫黄島島民三世の会』では会員を募集致しております。共に学び、語り合い、いつの日か一緒に硫黄島を訪れたい。事務局（電話 047-458-3615、islandvideo1976@gmail.com）まで。お待ちしております。

北方領土と硫黄島 ふたつの シンポジウム

日本の国境離島のうち、島全体の
島民が帰還できない代表的なふたつの地域
「北方領土」と「硫黄島」

両地域のたどってきた歴史経験と
人々の現実、そして歴史の継承を考える機会として

写真と文◎全国硫黄島島民3世の会



硫黄島民の戦前・戦争・前後の経験をテーマとした小説を発表した滝口悠生さん（右）

「2025年は“戦後80年”を記念するさまざまなイベントが行われ、硫黄島地上戦80年も想起されることでしょう。しかし、硫黄列島の“国策に翻弄された130年”の重い歴史をふまえるとき、2024年の“強制疎開80周年”には特別の意味があるのです」

このシンポジウムの司会・オーガナイザーである石原俊教授の上記の言葉の通り、昭和19年に硫黄島島民は“強制疎開”によって故郷を離れその時から現在まで帰ることができていません。今回開催されたシンポジウムでは、戦前の島の生活を知る1世、その子・孫・ひ孫の世代である島民2世・3世・4世がひとつの会場に集まるものになりました。

各世代の思いや考え、島民の歴史や記憶を未来にどのように受け継いでいくのか。一緒に考えていこうという大変貴重な場となりました。

第1部は歴史の縦軸をつなぎ

2022年、硫黄島民の経験をテーマとする小説「水平線」（新潮社）を発表し、自身も硫黄島民3世である作家・滝口悠生さんと、戦前の硫黄島に暮らした1世であり、戦後も遺骨収集や帰島運動などの活動を続けられる奥山登喜子さんを迎え、戦前の島での生活や強制疎開について、記憶や強い思いを感じられる講演となりました。

第2部は各団体の横のつながり



活動内容を発表する小笠原村在住硫黄島旧島民の会、楠事務局長

また第2部では、東京都小笠原村（この日は渋谷村長をはじめ村議会議員の方々が多数来場）、公益財団法人小笠原協会、一般社団法人硫黄島帰島促進協議会、全国硫黄島島民の会と島民3世の会、小笠原村在住硫黄島旧島民の会という、主要な硫黄島関連団体が一堂に集まる場となりました。ひとりひとりが立場は違えど硫黄島への強い思いと考えると思う存分発表されていました。

多数のマスコミ関係、来場者からの質疑応答もあり時間が足りなくなるほどの盛会ぶりでした。

3世の会として何ができるのか、改めて考えつつ、たくさんの方々の関心と支えを感じられるシンポジウムとなりました。

シンポジウムに参加して



高橋淑子さん（左）、3世の会会長 西村（中）、島民1世 奥山登喜子さん（右）

第2部のパネルディスカッションに参加した高橋淑子さん（島民2世）から今回の感想をいただきました。

“「硫黄島強制疎開80周年記念シンポジウム」に参加させていただき、大勢の人の前で初めて、今は亡き祖父からの言葉「硫黄島に家があって生活をしていたこと。硫黄島を忘れないで欲しい。硫黄島のことを頼む

硫黄島

「硫黄島強制疎開80周年記念シンポジウム」2024.2.17

な」について話をさせてもらいましたが、私自身とても楽しみだったのは、島民1世の奥山登喜子さんと島民3世で作家の滝口悠生さん、島民2世の伊藤謙一さんの、1世、2世、3世それぞれの立場の考えや思いを直接聞くことができるということでした。

当時の島での生活の話や戦争から今に至るまでの思い、これから考えていかなければいけない問題等を聞くことができ、とても良い経験と勉強になりました。

そして私自身は硫黄島のことにについてまだまだ知らないことがいっぱい、勉強不足ということを改めて痛感しました。祖父からの言葉を次の世代に伝えていくためにも私自身何ができるのかを考えていきたいと思います。”

たかはし・よしこ

硫黄島島民3世の会
西部落 漁師 大野巖一、チヨの孫
神奈川県の方在住

2024年、硫黄島にて



シンポジウムを動画でご覧いただけます

硫黄島強制疎開80周年記念シンポジウム

主催：明治学院大学国際平和研究所／全国硫黄島島民3世の会

後援：東京都小笠原村／明治学院大学社会学部附属研究所／公益財団法人小笠原協会／一般社団法人硫黄島帰島促進協議会／全国硫黄島島民の会／小笠原村在住硫黄島旧島民の会

〔趣旨説明・司会・オーガナイザー〕石原 俊（明治学院大学社会学部教授・PRIME所員・全国硫黄島島民3世の会顧問）

〔開会挨拶〕渋谷正昭（小笠原村長）

第1部

〔基調講演〕「硫黄島強制疎開80周年にあたって」滝口悠生（作家／硫黄島民3世）奥山登喜子（硫黄島民1世）



硫黄島強制疎開80周年記念シンポジウム 第2部

〔島民各団体の紹介〕

〔パネルディスカッション〕

伊藤謙一（硫黄島帰島促進協議会副会長／島民2世）

高橋淑子（全国硫黄島島民の会会員／島民2世）奥山登喜子 滝口悠生



北方領土

「戦争、国家、失われた故郷—北方領土×硫黄島」2024.1.20

北方領土1世の方たちのポートレート撮影と、当時の生活などを聞き取りする活動をされている山田淳子さんの活動を知ったときに、硫黄島島民3世の会にとって参考になるとともに、同じ志のようなものを感じました。その山田さん発案となるシンポジウムに3世の会もお声がけいただきました。

「歴史的経緯や状況は全く違っても、戦争で故郷を奪われた点は両島とも同じ」と主催の北海道大学スラブ・ユーラシア研究センターの岩下明裕教授は仰ります（第1部で基調講演）。



このシンポジウムの発案者で司会の山田淳子さん（一番右） 歯舞群島志発島元島民3世



硫黄島島民3世の会は、戦前の暮らしや記憶の伝承に向けた会での取り組み等を発表

戦前に根室と国後島を結んだ通信用海底ケーブルの中継施設「陸揚庫（りくあげこ）」の保存活動などをされる久保浩昭さん（国後島民2世）がお話された「今住んでいるロシアの島民に出て行って言っても、今度は彼らが故郷を失ってしまうってことなんですよ」という言葉と、現在はストップしてしまっているビザなし交流で一緒に食事をした時に腕相撲をしている時の写真（とても楽しそうなと、ロシア人の体格の大きさ！）がとても印象に残っています。

北方領土と硫黄島は状況はいろいろ違うのかもしれない。しかし、当時を知る人は少なくなっているのは同じだと思う。今を生きるわたしたちがどのように向き合っていくのか、なにができるのか。

とても勉強になるシンポジウムでした。次は根室に行きますね！

戦争、国家、失われた故郷—北方領土×硫黄島

主催：北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター

共催：明治学院大学国際平和研究所(PRIME)

後援：根室市／独立行政法人北方領土問題対策協会／

NIHU「東ユーラシア研究」北大SRC拠点／

明治学院大学社会学部附属研究所／

公益社団法人千島歯舞諸島居住者連盟／全国硫黄島島民3世の会／

一般社団法人硫黄島帰島促進協議会

<プログラム>

①基調講演

岩下明裕(北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター教授、NPO法人国境地域研究センター副理事長) 「国境島嶼史・北方領土史について」石原俊(明治学院大学社会学部教授、国際平和研究所所員、全国硫黄島島民3世の会顧問) 「硫黄列島史・小笠原諸島史について」

②パネルディスカッション

「島民子孫の歴史継承の取り組みについて」

北方領土:久保浩昭(北方領土国後島元島民2世、旧通信省千島回線陸揚庫保存会会長)

硫黄島:西村怜馬(硫黄島旧島民3世、全国硫黄島島民3世の会会長)、

羽切朋子(硫黄島旧島民3世、全国硫黄島島民3世の会副会長)

コメント:岩下明裕、石原 俊、鈴木英生(毎日新聞オビニオン編集部専門記者)

司会:山田淳子(北方領土歯舞群島志発島元島民3世、写真家)

硫

黄島は亡くなった祖母の生まれ故郷で、祖母は「おやつにマンゴーを採って食べた」

「島を歩いて一周した」といった楽しい思い出や、祖母の兄が二〇歳で軍属として島に残り戦死したことを話してくれました。こどもの頃から硫黄島を訪れたい思いがあり、今回の硫黄島視察の同行でようやくその思いが実現しました。

同行した旧島民の登喜子さんから、旧島民の家や小学校の跡地を巡りながら当時の貴重な硫黄島の生活について聞くことができました。貯水タンクに雨水を貯めた経験や、ガジュマルのプランコで遊んだ思い出、果物が沢山採れたこと、そして祖母の兄と同じく、島に残り戦死した二人のお兄さんについても話していただきました。

美しい空や海とは対照的に、島には多くの弾痕や壕など戦争の跡がそのまま残り、その光景に心が追いつきませんでした。

硫黄島での幸せな生活が強制疎開によって奪われ今も帰れない現実。大切な人が島に残り戦死した事実。これらの歴史を忘れてはならないと、改めて平和について考えさせられました。

初対面にもかかわらず、色々なことを教えていただいた登喜子さんや小笠原村議員の皆様、自衛隊 防衛省の皆様。硫黄島への真剣な思いに触れ、本当に感謝しています。🍌



硫黄島島民一世(昭和8年生まれ、強制疎開時満11歳)奥山登喜子さんにとっても待望の“宿泊での”帰島となりました。三世の会会長・西村が同行



せきね・しほ
一九八〇年生まれ
埼玉県出身・東京都在住
祖母・吉田静子
(旧姓・奥田 島民一世)の孫



渋谷正昭小笠原村長と登喜子さん
硫黄ヶ丘にて

村政運営の向上を図る上で参考になると判断した地域や施設等を視察すること
を目的としています。

硫黄島については基地整備の状況や遺
骨収集事業の進捗、訪島事業実施の参考と
するなどの目的で、年一回北関東防衛局を
窓口を実施しているものです。

参加対象者は村長及び村議会議員です
が、今回は旧島民の声を現地で聞きながら
今後の訪島事業（墓参）の参考とするため
に、参加人数枠を増やしてもらい旧島民の
皆さんに参加いただきました。

小笠原村の行政視察

(ぎょうせいしさと)とは？

村政運営の向上を図る上で参考になると判断した地域や施設等を視察することを目的としています。

硫黄島については基地整備の状況や遺骨収集事業の進捗、訪島事業実施の参考とするなどの目的で、年一回北関東防衛局を窓口に実施しているものです。

参加対象者は村長及び村議会議員ですが、今回は旧島民の声を現地で聞きながら今後の訪島事業（墓参）の参考とするために、参加人数枠を増やしてもらい旧島民の皆さんに参加いただきました。



「視察2日目の金明水(島の北東)付近です。視察中はずっと天気が悪く、ようやく晴れ間が見えたところです。奥に噴煙があがっているのが見えて硫黄島らしいな、と思って撮影しました」撮影 関根



はじめての《硫黄島》

祖母の生まれ育った島に初上陸して感じたこと

「令和5年度 小笠原村硫黄島行政視察」
令和6年(2024年)2月15日木曜日、16日金曜日

文と写真◎全国硫黄島島民三世の会 関根詩帆